

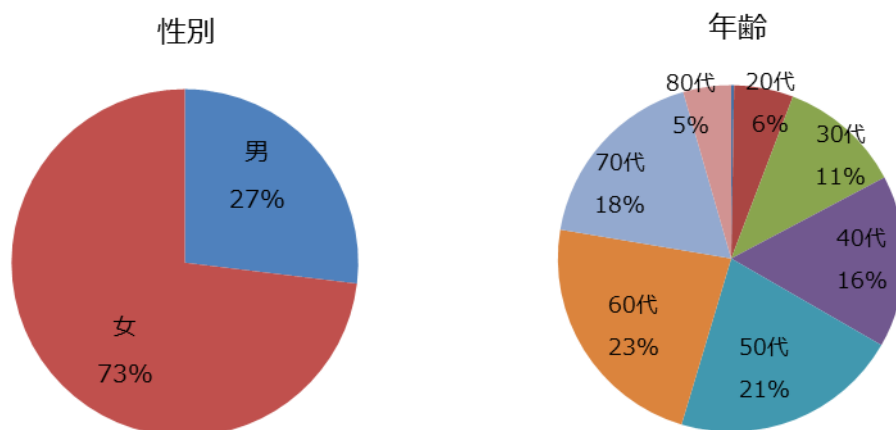
公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団 「平成 24 年度 市民講座アンケート集計報告」

勇美記念財団では、一般市民の在宅医療への理解を促し、その啓蒙・普及に貢献する「市民講座」の開催を支援しています。平成24年度、助成を行った市民講座の数は、これまでで最も多い40講座となりました。開催にあたっては毎回、参加された方々にアンケートを行い、在宅医療に対してどのような意識を持っているか、また自らの最期についてどのように考えているか、調査を行っています。ここでは、その集計結果をご報告いたします。

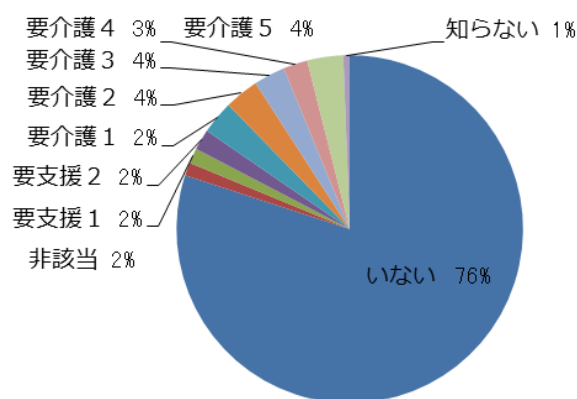
1. 参加者の概要

参加者の概要は、これまでとほぼ同様です。男女比については全体の4分の3を女性が占め、年齢層も 40～60 代を中心に幅広い年代の方々にご参加いただきました。

また、介護している対象者の有無については、「いない」が4分の3を占めています。



Q 介護をしている対象者はいますか？



2. 介護の実態

続いて、「介護している方はいますか」の問いに「いる」と回答した方へ、その実態について具体的な質問を行っています。

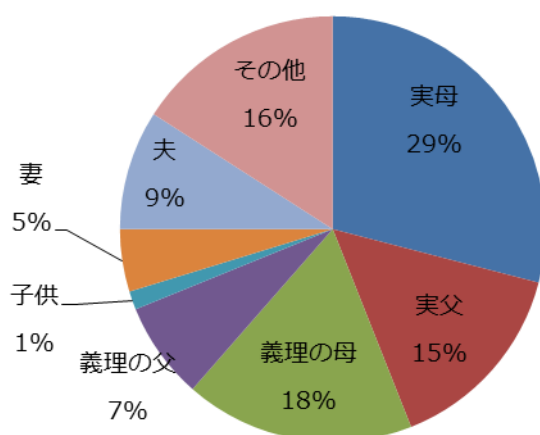
全体的な傾向としてはこれまでと変わらず、介護の対象で多いのは実母、実父、義理の母。また長期での介護を経験している方も少なくありませんでした。

①対象者との関係、介護度、療養場所など

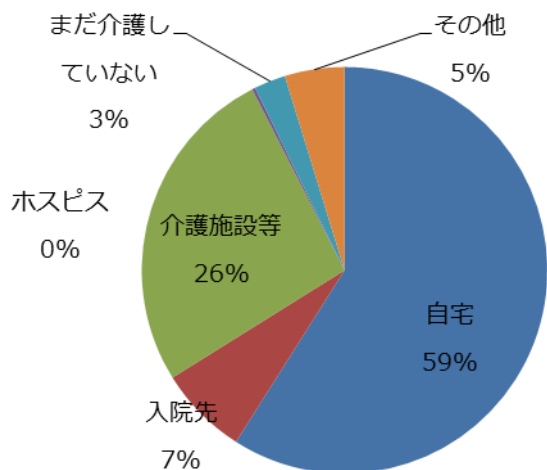
“誰を介護しているのか”の問いに対して、最も多かったのは「実母」で 29%。次いで「義理の母」「実父」が多くなっています。

介護している場所は、最も多いのが「自宅」で 59%。次に「介護施設」26%となっています。介護の期間は「5年以上」が 35%で最も多く、「3年」26%、「1年」21%でした。

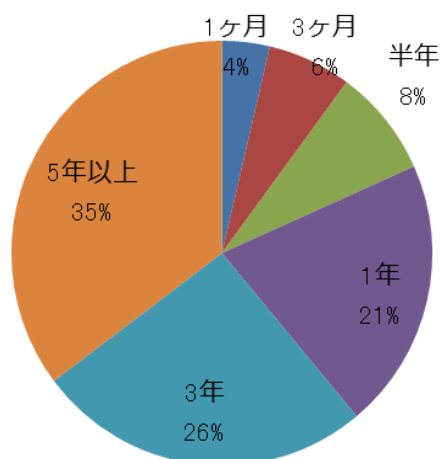
Q 対象者との関係は？



Q 介護している場所は？



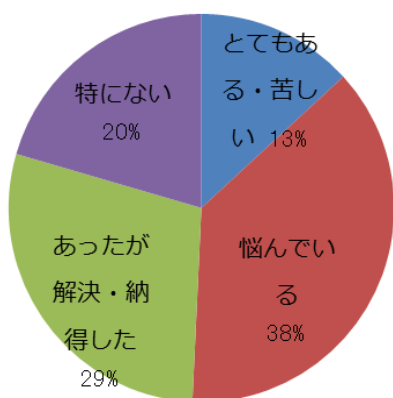
Q 介護の期間は？



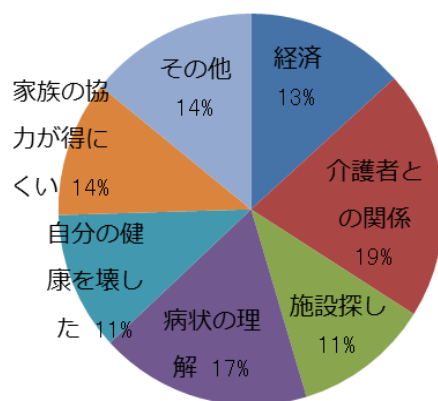
②介護における困難、および介護に不可欠な事項について

実際に介護をしていて感じる困難については、「とてもある・苦しい」と「悩んでいる」を合わせて 51%と、昨年に引き続き若干の減少傾向がみられます。一方で、「あったが解決・納得した」が 29%と、これまでよりもわずかではありますが多くなりました。困難の内容については、「介護者との関係」が 19%で最多。例年同様に複数回答が多く、介護をする方がさまざまな困難を複合的に抱えている実情は変わらないようです。

Q 介護していて感ずる困難は？



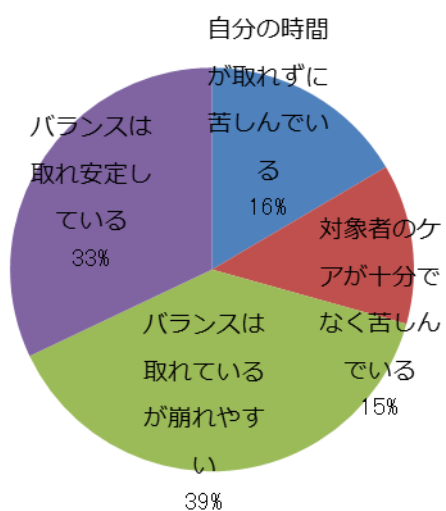
Q 困難の内容は？



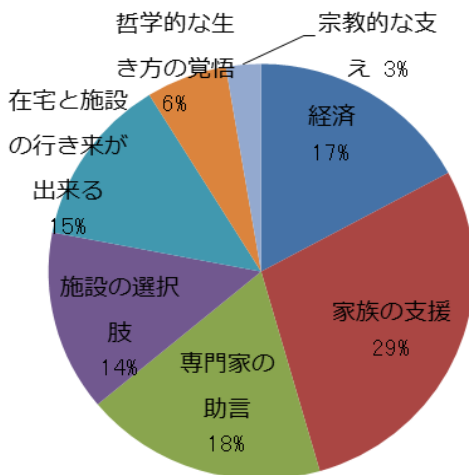
対象者のケアと自らの生活とのバランスについては、「バランスは取れているが崩れやすい」が 39%で最多。「バランスが取れ安定している」という回答は昨年と変わらず 33%でした。

自分の生活と介護の両立を助けるものは何か、という質問に対しては、「家族の支援」を挙げる人が最も多く 29%。続いて、「専門家の助言」「経済」となっています。また、療養者本人がどこで最期を迎えることを希望しているかについては、50%が自宅と回答しています。

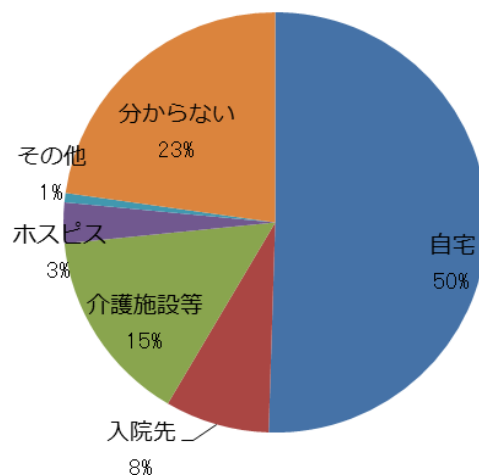
Q 対象者のケアとあなた自身の生活のバランスは取れていますか？



Q 介護と自分の生活の両立を助けるものは何ですか？



Q 対象者が最期を迎えるのに希望している場所はどこですか？



3. 自らが介護される場合について

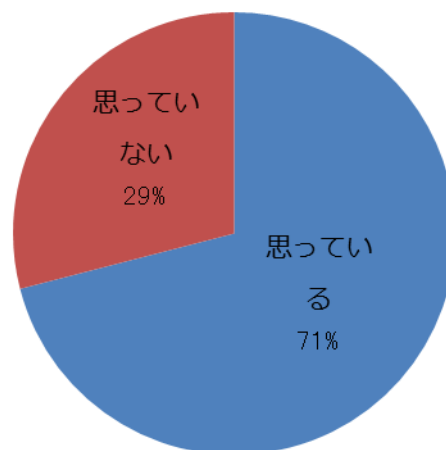
続いて、自分自身が介護される側になった場合についてはどのように考えているのか、質問しました。

まず、自らが要介護の状態になることに対して不安はあるか、という問いに対しては、71%が「不安に思っている」と回答。希望する療養場所については、自宅での最期を望むとの回答が、例年同様、約半数を占めています。

一方、誰に介護をしてもらいたいのか、という質問に対しては、自らの配偶者もしくは子供との回答が半数近くを占める一方、介護専門職による介護を希望する声も多くなっています。

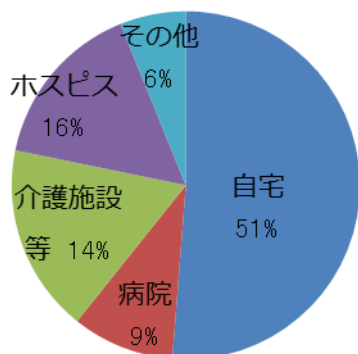
さらに、介護の費用については、約9割が「心配」「わからない」と回答。「リビングウィル(事前宣言書)」については、「書いていない」「知らない」が9割を超える結果となりました。

Q 自分が要介護になることを予測し、不安に思っていますか？

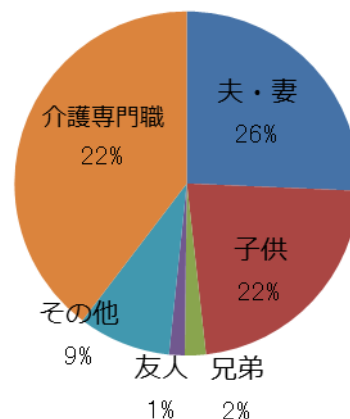


Q 要介護状態になった時、最期を迎えるのに希望する場所は？ 誰に介護してもらいたいですか？

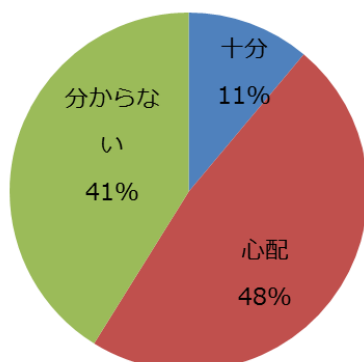
場所



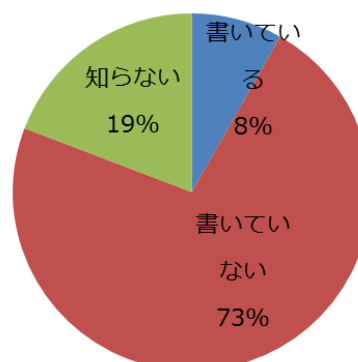
誰に



Q その場合の費用は？



Q リビングウィルを書いていますか？



4. 今、一番必要としていること(自由記載)

本アンケートでは、最後に、「今、あなたが一番必要としていること」について質問し、自由にコメントして頂いています。ご意見や感想などさまざまなコメントの中から、主立った内容を下記にまとめました。

○支えてくれる専門職の存在、また、その専門職やサービス等とつながるための情報

「自分の両親や義理の両親を、これから介護する時が来るかもしれません。いろいろな場面で支えてくれる人たちがいるということを知って、少し不安が解消されました」(30代女性)――

市民講座は、医療や介護の専門職など、在宅での暮らしをサポートしてくれる存在が地域にある、ということを知る一つのきっかけになっているようです。一方では、そういったサービスにアクセスするための的確な情報、仕組みの必要性を訴えるコメントも多く寄せられています。

〈その他のコメント〉

- ・在宅医療&介護が必要になった時に、対応して下さる医療職や介護職の方々が、近くにいる。そのような社会環境を希望しています。(60代男性)
- ・私は父を病院で看取りました。余命数週間と言われ、在宅での看取りを希望しましたが、在宅へつなげてくれる人に巡り合えず、あきらめました。的確な助言が欲しいと思います。(40代女性)
- ・老後を安心して過ごすために何をしておくべきか。情報が多く、またその情報が自分が年を取った時には変わっている可能性があり、不安になる。(40代女性)
- ・施設によって、いろいろと環境が違ったり、金額も異なるようなので、市の福祉課等で勉強の場を開設して欲しい。(60代女性)

○身近な人とのつながり、地域の支え合い

「いい天気だねえ、と言ったら、そうだね、と言ってくれる人がいること」(60代女性)――

専門職によるサポートが重要である一方で、身近な人との心の通ったやりとりは、何よりの支えになる大切なものです。アンケートでは、医療・介護サービスなど制度的なものの支えに加えて、家族や隣近所、地域の支え合いの必要性を強調する声も少なくありませんでした。

〈その他のコメント〉

- ・昔はあった「おせっかい」が、今はプライバシーの尊重と言って無くなってしまった。他人のプライバシーにぐいぐい入り込む「おせっかい」の掛け合いが、私の生活を持って楽しくしてくれると信じています。(40代女性)
- ・健康な時から準備を、とよく聞くようになりましたが、健康な時に相談したり、漠然とした不安を抱えた時に話を聞いてもらえる場がないことが、辛いと感じることがあります。(50代女性)
- ・病に長期にわたっておかれた時、治療やケアはもちろんですが、宗教者による心のケアのネットワークがあって、いつでも対話ができたらありがたいです。本人はもちろん、介護する側にと

っても必要です。(60代女性)

•どんなに現在、元気で、加齢による症状はいつ起こるかわかりません。そんな時、自分はどんな対応ができるのか、地域がどんな手助けをしてくれるのか、という悩みを社会全体で考えるような取り組みが必要。(70代女性)

○個人の認識、心構えの重要性を強調する意見

「一人でも多くの方が、“死”ということを実際に考える必要があると思います。宗教的、精神的な問題ではなく、正しく“自然死”を理解して、不適切な延命を避け、穏やかな死を迎えられるような社会になることを願っています」(40代男性)――

制度の充実、そして地域の支え合いなども重要ですが、その前提として、個人が自らの病や死とどう向き合うのか、ということが何よりも大切ではないか、といった根本的な問いかけも、アンケートでは少なからず寄せられています。

〈その他のコメント〉

•生まれた時は泣いていたので、死んでいく時は笑っていきたい。そのために社会人として、人としての生き方をし、社会に認めてもらうのが、自分の生きている意味だと思う。また、そのことを子供に伝えていきたいと思う。(30代男性)

•子が親の老化をしっかりと受け止め、前向きに捉えて、当たり前のこととして自覚すること。(50代女性)

•家族など、自分を支えてくれた人たちに感謝できるような、心の安らぎの中で死を迎えていきたい。自分の死を悔いのないものとして、周りに受け止めて欲しい。(50代女性)

○介護を経験している人からのさまざまな声

「自分の母を介護中です。どうしたら本人の尊厳を大切にしていけるか、ということを実際に考えています。医療や介護に関係しておられる方の、思いやりに期待します」(50代女性)

市民講座に参加されている方の約4分の1は、実際に介護をされている方であり、現実にはどのような課題を抱えているのか、当事者としてのコメントも寄せられています。必要なサポートが届いていない、あるいは、そもそも本人がサービス利用の必要性を理解していない等々、現実にはさまざまな問題があるようです。

〈その他のコメント〉

•83歳の義母は、介護認定を受けることも、サービスを利用することも拒否しています。ただ家の中で同じことを繰り返すことならできるのでどうにか生活しているが、認知症も進行していて、周囲の人と交わることもありません。何とか義母にサービス利用を理解してもらいたいです。(40代女性)

•現在、義理の父を自宅で介護しています。身近な人を見送った経験がなく、介護中の親をどのようにして見送っていけばいいのか、不安があります。今日の話を通じて、自分がどうすればいいのか、少し見えてきた気がします。(40代女性)

・介護を受けている人のフォローは、専門の人がいるから助かりますが、介護をしている人の精神面、健康面のフォローをして下さる機関があると助かります。(50代女性)

○その他、現状の問題点、要望など

「親子が同居する世帯が少なくなっている今、いろいろな制度を使うことで自宅で看取ることが本当にできるのか、今の社会ではそこが一番の問題だと思います。また費用のことも、親の年金が少なかったら全て子供が持つのか。核家族化、年金問題をふまえた具体的な事例が聞きたいです」(50代女性)

住み慣れた地域で最期まで暮らすことを実現するには、さまざまな課題があります。核家族化や年金問題など、現代社会が抱える問題をどうしていくのか、あるいは、病に対する偏見とどう向き合っていくのか、さまざまな意見や要望が寄せられました。

〈その他のコメント〉

・自分も93歳の義父を在宅介護しましたが、子供の少ない現在、これからは子供の介護は受けられないと思っています。そうかといって施設に入るには、年金暮らしには無理だと思います(50代女性)

・子供がいなくても安心して要介護状態で生きられる環境。(40代男性)

・認知症に対する偏見が根強いと思います。痴呆、ボケという言葉は使われなくなりましたが、表面だけではなく、真の意味での差別が無くなることを祈っております。認知症ライフパートナー試験が普及することを願っております。(50代男性)